

遺跡の発掘で富山の歴史を解き明かす考古学者になりたい

入門先：独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

日 時：令和5年度8月29日、30日

講 師：都城発掘調査部副部長 今井晃樹先生

都城発掘調査部考古第二研究室長 神野恵先生

都城発掘調査部遺構研究室研究員 高野麗先生

都城発掘調査部主任研究員 丹羽崇史先生

都城発掘調査部主任研究員 川畑純先生

企画調整部写真室専門職員 栗山雅夫先生

志望動機

私は歴史に興味があり、休日に遺跡の見学へ行く事もあります。昔の土器などの出土品に関わる仕事がしたいと思い、見つけたのが「考古学者」という職業です。いずれは富山県の歴史を解き明かし、それを基に現代人を正しく導く力になりたいです。そこで、より深い知識を身につける必要があると考えました。

短期入門の内容

(8月29日 1日目)

- ・講義「平城宮・京跡の発掘調査について」
- ・奈良時代の土器についての講義
- ・平城宮跡の発掘調査現場から出土した土器の洗浄・接合体験

(8月30日 2日目)

- ・発掘調査体験(遺構検出作業、遺物取り上げ作業)

事前に考えた10の質問

- ①奈良時代の行事・大茶盛に使われたお椀は残っているのか。
- ②出土した木簡は何に使用され、どこから出たものか。
- ③奈良時代のまじない道具は現時点で出てきているのか。
- ④遺物が出土する頻度はどれくらいか。
- ⑤新しいものを発見した時、どのような手続きをして公開にいたるか。
- ⑥平城京の出土品に「呪いの人がた」というものがあるが、当時どのような身分の人が呪いを行っていたのか。
- ⑦富山県のヒスイは平城宮から出土しているのか。
- ⑧ヨーロッパからの輸入品は平城宮にあるのか。
- ⑨奈良時代の装飾品でよく使われていた石は何か。(硬度はどれくらいか)
- ⑩魚の骨の小さなかけらが見つかったとき、どの部位なのかをどうやって特定するのか。

8月29日 1日目

講義「平城宮・京跡の発掘調査について」

～わかったこと～

質問の答え

- ①10月に行われた大茶盛は奈良時代にはなかった。
鎌倉時代からみんなに茶を飲んで欲しくて始めた行事。
今も西大寺で行われているが、現代の茶わんを使っている。
- ②昔は紙が貴重で木を書類代わりにしていた。荷物の中身を記す荷札や字の練習、落書きに使用された。
ごみを埋めた穴から出てくることが多い。地下水が高くたまっているところに捨てられていると木簡が腐らずに残っている。
- ④6カ月間の発掘調査で瓦が6トンでてきたこともある。
- ⑧ヨーロッパの輸入品は平城宮にはない。平城宮にある輸入品は中国や朝鮮などの物が多い。

～感想～

驚いた事は、昔は木材より紙の方が貴重で落書きは木にしていたことです。

調べてみると、平城宮跡から出土した木簡には「へんつき」という遊びに使用されたと思われるものがあるそうです。

昔は木を好きなだけ遊びに利用できたのだと分かり、驚きました。



写真：今井先生の解説



写真：今井先生が香木の香りをかがせて下さった時の様子

奈良時代の土器についての講義

～わかったこと～

質問の答え

- ③「かたしろ」というものが出土している。人形にけがれをうつし、川に流すもので、庶民は木製、位の高い人は金属製の人形を使用する事が多い。

日本書紀には「土牛」というものが登場するが出土するのは土馬ばかりであるため、謎に包まれている。

- ⑥呪いの人がたは、庶民は木製のものを天皇などは金属製のものを使用していた。

- ⑦富山県のヒスイは平城宮からはあまり出ていない。東大寺の観音様には勾玉をたくさん身に着けているものもあるため、富山県のものもあるかもしれない。

平安時代には帯に石を付けることが流行し、あまりにも派手な石を付ける人がいて「派手なものはダメ」とお達しがあったそう。

- ⑩現在の骨と見比べてどの部位か調べる。

骨に残る傷で、どのようにして仕留めたか研究する場所もある。

土器洗浄体験

須恵器…1000℃～1100℃で焼かれている。固いので、歯ブラシのようなものでこすって洗う。

土師器…800℃くらいで野焼きにされている。

～感想～

土器を洗っていると、黒ずんだものを見つけました。先生に聞いてみると、「転用硯」の可能性があると分かりました。転用硯は役人などが食器の裏で墨をすり、硯として使ったものです。硯には蹄脚円面硯や風字硯などもあり、それについてのお話も興味深かったです。土器洗浄の段階だけでもいろいろなことが分かり、とても興味を魅かれる作業だと思いました。



写真：神野先生の丁寧な説明



写真：土器洗浄体験

土器接合体験

～感想～

なかなかぴったりくっつくかけらが見つからず、苦戦しました。コツとしては、色合いが似ており同じ土器のかけらと思われるものを近くに置いておくことが大切だそうです。細かいかけらや割れてから時間がたったものなどはくっつきにくく、大変な作業ですがその分、接合した時の喜びは格別なため、とてもやりがいのある作業でした。



写真：接合体験



写真：お世話になった神野研究室の皆さんと

8月30日 2日目

遺構検出作業

～感想～

遺構検出作業とは、色など土質の違う土の境目に線を引き、柱穴などの遺構を示す作業のことです。「がり」と呼ばれる用具を使います。この作業で興味深いと感じた所は、色はもちろん、「がり」で削ったときの感触にも着目して土の違いを感じる事です。そのため、人によって線を引く場所が違い、議論を交わすことも多いそうです。私達がいつも読んでいる歴史の教科書に書かれたこともたくさんの方の意見がぶつかり合った末に出された結論なのかもしれないと思うとすごい作業だと思いました。



写真：遺構検出作業



写真：線が引けました

遺物取り上げ作業

～感想～

遺物を傷つけないように遺物の周りを「がり」で丁寧に削っていき
ました。私が取り上げた物は瓦と江戸時代の物と思われる、磁器のお
わんです。先生方は瓦の表面のつやや模様などの細かい部分を見て、
いつの時代のものなのかを説明して下さいました。何も見ずに正確に
遺物を分析していく姿がとてまかつこよく、憧れました。

また、今回の発掘調査体験でお世話になった高野先生は建築史の勉
強をされていた方で、「建築の専門家の視点も考古学や文献史学の専門
家の視点も取り入れて調査を行う」とおっしゃっていました。考古学
者は幅広い分野の知識が役立つ職業なのだと分かりました。

～研究室の種類について～

高野先生に研究室の種類について教えていただきました。

- ・考古第一研究室…二、三以外の研究をする。(木製品や金属など)
- ・考古第二研究室…土器の研究者が集まる。
- ・考古第三研究室…瓦の研究者が集まる。
- ・史料研究室…木簡など文字史料の研究者が集まる。
- ・遺構研究室…建造物についての研究をする。



写真：遺物取り上げ作業



写真：瓦が見つかった場所



写真：お世話になった先生方と



写真：私が取り上げた遺物

短期入門を通して

今回の入門では、貴重な体験を沢山させていただきました。

遺跡を巡るなど歴史について学ぶ事はしてきましたが、「考古学者」という職業について知る機会はありませんでした。入門前は、考古学者は漠然と想像力で仮説を立てているイメージがありましたが、今回の入門でお世話になった先生方は細かい部分に隠された手がかりや周りの状況をヒントに一つ一つの遺物と向き合っていました。栗山先生によると、考古学者は昔の発掘調査報告書を参考にしながら研究を進めるそうです。先生方の様な研究者になる為には、幅広い知識が必要だと気づきました。これからも遺跡や埋蔵文化財センターを訪れ、遺物の知識を深めたいと思います。

私の夢は考古学者です。今までは考古学者のざっくりとしたイメージだけで夢を語っていましたが、今回の入門を経て、より一層「なりたい」という気持ちが強まりました。土器の種類が多さ、それらが示す歴史に興味を持ったため、土器の専門家に憧れました。

今回の体験で夢がさらに明確なものとなりました。今後は、この気持ちを忘れずに学問を追究していきたいと思います。



写真：平城京跡を展望台から見渡した写真

写真：奈良文化財研究所の前にいる私

